

タイ所伝 *Paññāsa-jātaka* 中の *Sutadhanu-jātaka* について

茨 田 通 俊

Pannāsa-jātaka は、東南アジア方面に独自に流布したジャータカ群である。これは、いわゆる聖典ジャータカとは異なる偽経ジャータカである。一般に 50 話にまとめられた同名のジャータカ群が、東南アジア各地に存在するのであり、決して特定の本生話集成を意味するものではない。タイ・カンボジア、ビルマ、ラオスの 3 系統に大別されるが、伝承地域によって構成や内容はかなり異なっている。

ビルマ方面に流布したものについては、既に P.S.Jaini 博士が *Zimme Paññāsa* (『チェンマイ 50 話』) として校訂出版しているが¹⁾、タイ方面に伝承されたものは未だ刊本が存在しない。我が国では十年来、*Pannāsa-jātaka* 研究の先駆者田辺和子博士と吉元信行大谷大学教授を中心に、タイ所伝 *Pannāsa-jātaka* の校訂と翻訳に取り組むプロジェクトが生まれ、研究が続けられて来た。

現在も十数名の研究者が分担して数種類の貝葉写本を照合しつつ、タイ所伝 *Pannāsa-jātaka* の校訂作業に当たっている。本論では筆者が担当した物語のうち、タイ所伝 *Pannāsa-jātaka* の 3 番目に位置する (ビルマ版では 20 番目) *Sutadhanu-jātaka* について紹介すると共に、その特徴を考察したい。

文中の主人公は *Sudhanu* (弓術に優れた者) の名で現れ、この物語は *Sudhanu-jātaka* の名で一般に知られている。しかし物語の末尾に現れる名称は、多くの写本が *Sutadhanu-jātaka* となっている。なお、ビルマ版は *Sattadhanu-jātaka* である。

Pannāsa-jātaka の各物語とも原則として、現在分、過去分、結分というジャータカの基本的な構成に倣って作られている。*Sutadhanu-jātaka* では、ビルマ版 *Zimme* について、田辺博士と木下航二氏の和訳²⁾がある。田辺博士らはビルマ版を和訳する際、過去分を 3 章に分けており、タイ伝承資料についてもこれをそのまま踏襲できそうである。*Sutadhanu-jātaka* の概要は、以下の通りである。なお、全体が非常に膨大な量の物語なので、本論では過去分の第 1 章を中心に、その特徴をまとめることとしたい。よって、第 2 章以下はビルマ版にしたがって簡潔に

まとめるに留める。

〈現在分〉仏陀が魔軍を打ち破って悟りを開いたことを語る比丘たちに対して、仏陀が過去にもガンターラ夜叉たちを破ったことがあると語る。

〈過去分〉《第1章》(1) バーラーナシーの王ブラフマダッタに子供がないことで、市民が王位継承を心配する。王は宮廷の女性を集めて、子息を産めばその子に王国のすべてを与えることを約束する。(2) 第一王妃ケーシニーは、布施をし戒を守って、息子の出産を願う。帝釈天に乞われた菩薩が、鷹(帝釈天)が落としたなつめの実を食べたケーシニーの胎内に宿る。同時になつめの種を食べた牝馬がその子マニカッカを産む。(3) ケーシニーは男の子を産み、スダヌと名付けられる。弓術の達人であるスダヌ(菩薩)は、従兄のカニッタとその妹カレーヌヴァティーのことを語る。(4) 菩薩が16歳の時にブラフマダッタ王が亡くなる。即位の灌頂式の際に、菩薩が盛装したマニカッカに乗ると、馬は遠くへ跳んで行ってしまう。(5) 嘆く王妃を思い、菩薩は馬の頭を切り落とそうとするが、マニカッカに自分は王国に恩恵をもたらす者だと言われて止まる。(6) 菩薩とマニカッカは、セータ王が統治する町にやって来る。チラッパパーという名の娘がいたが、王は多くの結婚の申し出を断り、デーヴィンダデーヴァの召使にしようと、侍女パドゥマーと共に、彼女を七層の宮殿に住まわせる。(7) チラッパパーの美貌の噂を聞いた菩薩は、マニカッカと共に彼女の宮殿を訪れる。寝室に入った菩薩は、チラッパパーの美しさに見とれて、彼女の身体に香を塗り、花輪を結ぶ。(8) チラッパパーが忘れられない菩薩は、何度も寝室を訪れる。ヴィンダデーヴァの来訪と考えたチラッパパーは、ある夜パドゥマーと共に眠らずに待つことにする。(9) 菩薩の姿を見たチラッパパーは満足し、パドゥマーと共に菩薩を引き留める。菩薩は彼女たちと共にそのまま7日間を過ごし、自分の素姓を明かす。(10) 飲食物や香が大量に消費されることについてパドゥマーを問い詰めた他の召使たちに、菩薩は事実を正直に打ち明ける。それがセータ王に伝わり、激しい怒りを買う。(11) 菩薩の弓術を試そうと考えたセータ王は、大臣たちにその用意をさせる。(12) 菩薩は誰も張れない弓の弦を軽々と引っ張ると、放った矢で用意された各々7つずつ5種の障害物(イチジクの板、鉄板、銅板、砂車、ターラ樹の板)を射抜き、見ていた人々を驚愕させる。(13) セータ王を初めすべての人々に祝福されて、菩薩はチラッパパーと結婚する。

《第2章》自国へ帰る途上、マニカッカが夜叉の手に落ちる。逃避行の際に船が難破、過去世の業報故に菩薩とチラッパパーは離れ離れになる。布施堂を建てたチラッパパーは、それまでの経緯を絵に描かせる。一方菩薩は、夜叉女姉妹と関係を持つ。

《第3章》菩薩は夜叉女の妹の手を借りて、マニカッカを取り戻し、チラッパパーの布施堂を訪れて彼女と再会を果たす。帰国後夜叉の国を再訪し、夜叉に五戒の功德を説いて、夜叉女姉妹を連れ帰る。

〈結分〉過去物語の登場人物が、現在の人物と結びつけられる。

これは、菩薩であるスタダヌ王子と妻チラップパーとの別離と再会を軸とした冒険活劇であり、*Pannāsa-jātaka* に多く見られる布施や善業の物語とは趣を異にしている。全体として話が奇想天外、荒唐無稽な印象であり、唐突に物語が展開する感じを受ける。これは様々な要素の話が取り入れられて、一つの長大な物語を形成していることの現れであろう。デーヴィンダデーヴァ (Devindadeva 概要の過去分第1章6) は、ビルマ版では Vindadeva となっており、Govindadeva 即ちヴィシュヌ神を表す可能性を Jaini は示唆している³⁾。だとすればヒンドゥー文化の影響を否定できない。また、スタダヌ王子がチラップパー姫の寝室を訪れた際、侍女パドゥマーの背に雌亀 (kummi ビルマ版は kummarūpa) を描く (概要の過去分第1章7) のであるが、これについて、カンボジアでは雌亀が仲人を表すことから、東南アジアの習俗との関係が指摘されている⁴⁾。これらは、この物語が様々な文化の様相を取り入れて成立していることの証左であろう。

過去分の冒頭箇所を例に、タイ所伝資料とビルマ版 *Zimme Paṇṇāsa* の叙述を比較してみたい。上に示すのがタイ所伝資料からのもの、下がビルマ版である。下線を施した部分が両者で異なる箇所、太字イタリック体が各々の増広箇所である。

atīte bhikkhave Bārāṇasīyam Brahmadatto nāma rājā rajjaṃ kāresi. tadā soḷasannaṃ itthisahassānaṃ pamukhā Kesinī nāma aggamaheśi ahoṣi. tāsū ekā pi puttaṃ vā dhītaṃ vā na labhi. **atha** nāgarā rājāv aṃsanurakkhanatthāya rājānaṃ upasaṅkamitvā upakkosam akāmsu. tasmim̐ khañe rājā sihapaṇjaraṃ vivaritvā mahājanaṃ disvā kiṃ bhane ti pucchi. te añjaliṃ paggayha **evam** āhaṃsu: deva tayi divaṅgate mayam̐ anāthā bhavissāma rājavaṃsam̐ ghaṭetuṃ samatthaṃ puttaṃ paṭṭhethā ti.

「比丘らよ、昔バーラーナシーでブラフマダッタという名の王が国を統治していた。その時、1万6千人の女性の首長であるケーシーという名の第一王妃がいた。彼女たちのうちの一人として息子も娘も授からなかった。そこで市民が王統を護るために王に近づいて非難した。その時王は窓を開け、大群衆を見て、『いったい何事か』と尋ねた。彼らは合掌して次のように言った。『陛下、あなた様が天に召されたら、我々は護り手のない者になってしまいます。王統を維持するために強いご子息をお望み下さい』と」

atīte bhikkhave Bārāṇasīnagare Brahmadatto nāma rājā rajjaṃ kāresi. tadā soḷasānaṃ itthisahassānaṃ pamukhā Kesinī nāma aggamaheśi ahoṣi. tāsū ekā pi puttaṃ vā dhītaṃ vā na labhiṃsu. nāgarā rajjaṃ rakkhanatthāya rājānaṃ upasaṅkamitvā ugghosim̐su. **atha** rājā sihapaṇjaraṃ vivaritvā mahājanānaṃ disvā kiṃ bhonto ti pucchi. te añjaliṃ paggayha ahaṃsu: deva tayi divaṅgatakāle katham̐ bhavissāma, rajjaṃ kātuṃ samatthaṃ puttaṃ paṭṭhethi **devā** ti.

「比丘らよ、昔、パーラーナシーの町でブラフマダツタという名の王が国を統治していた。その時、1万6千人の女性の上首であるケーシニーという名の第一王妃がいた。彼女たちのうちの一人として息子も娘も授からなかった。市民が王国を護るために、王に近づいて叫んだ。そこで王は窓を開け、大群衆を見て、『何事か、皆々方』と尋ねた。彼らは合掌して言った。『陛下、あなた様が天に召された時には、我々はどうなるでしょう。国を治めるために強いご子息をお望み下さい、陛下』と」⁵⁾

散文については、タイ・ビルマ両伝である程度の合致が見られる。この過去の冒頭箇所が、特にタイ・ビルマ両伝の合致度が高いことは確かだが、第1章全体を通じて散文の平行句も随所に見られる。

過去分第1章における偈は、タイ・ビルマ両伝とも以下の1偈のみである。マニカッカに乗ってスタダヌが去って行ってしまったことを母親である王妃が嘆く場面（概要の過去分第1章5）である。会話文がそのまま偈になるのは *Pannāsa-jātaka* の特徴であり、聖典ジャータカのように散文が偈の註釈に相当する構成ではない。よって *Pannāsa-jātaka* では、散文と偈は同時に成立したと考えられる⁶⁾。

hā hā putta nivattassu mā maṃ anāthaṃ karohi

aṃṃ puttaṃ na passāmi hadayaṃ me phalissatī ti /

「ああ、ああ、息子よ、戻って来なさい。私を護り手のない者にしないでおくれ。私は今日、息子に会っていない。私の心臓は裂けそうだ」

hā hā putta nivattassu mā anāthaṃ karohi me

aṃṃ puttaṃ na passāmi hadayaṃ me phālessatī ti /

「ああ、ああ、息子よ、戻って来なさい。私を護り手のない者にしないでおくれ。私は今日、息子に会っていない。〔このことは〕私の心臓を裂きそうだ」⁷⁾

上のタイ所伝資料からのものと下のビルマ版で、偈がほぼ合致していることが知られる。*Pannāsa-jātaka* では、パーリ聖典より偈が引用される場合があるが、上記に類する偈は、筆者が調べた限り聖典ジャータカ等にも見られなかった。一部に韻律の乱れが見られるが、*Pannāsa-jātaka* の特徴として、韻律を無視して表面上パーリ語の偈の形を取っている場合も多い。したがって、タイ・ビルマ両伝の間で改変の根拠を韻律に求めることは難しい。

他の物語ではストーリーのみが同じで、散文・偈とも両伝承の間でほとんど表現が合致しないものも見られる⁸⁾。こうした物語は、タイ・ビルマ両伝承資料の間に交流がなく、元々流布していた物語を各々別個に編纂したということが言える。タイ・ビルマ両方の *Pannāsa-jātaka* に収まる話であっても、物語によって事

情が異なるようであるが、少なくとも *Sutadhanu-jātaka* については、タイ・ビルマ両伝の間で何らかの関係があったと考えるのが自然である。

また、タイ所伝資料・ビルマ版の各々にのみ見られる増広箇所も存在する。タイ所伝資料にのみ存在する叙述の例としては、スタダヌ王子の誕生に際して、予言者たちが呼ばれ、「弓術に長けた者となる」と予言する場面（概要の過去分第1章3）がある。またビルマ版にのみ存在する叙述の例としては、寝室に何度も訪れる菩薩の正体を知るために、チラッパパーがパドゥマーとどうすれば眠らずに済むかを話している場面（概要の過去分第1章8）がある。

しかし全体として、どちらが詳細に描かれているというようなことは必ずしも言えず、文献学的に物語の源泉を辿る判断になるような材料は目下見出せない。ただ万一二つの伝承の間で交流がなかったとしても、*Sutadhanu-jātaka* は *Pannāsa-jātaka* の中でもポピュラーな物語であることを考慮すれば、タイ・ビルマ各々の方面でパーリ語に表される際に、既に十分に成熟した物語として流布していた可能性が高い。したがって、多少の脚色を加えられたにしても、結果として両者が類似した表現から成るに至ったと考えられなくもないだろう。

- 1) *Pannāsa-jātaka or Zimme Paṇṇāsa*, 2vols, PTS, 1981, 1983.
- 2) 田辺和子・木下航二「*Pannāsa-jātaka* 中の *Sattadhanujātaka* 訳注(1)」(『仏教研究』第28号, 1999).
- 3) 注1前掲書, Vol. 2, p. xxiv; 田辺・木下前掲論文, p. 93.
- 4) G. Terral, “*Samuddaghosajātaka*: Conte Pāli Tiré du *Pannāsa-jātaka*,” *Bulletin de l'École Française d'Extrême-orient*, Tome 48 Fasc. 1, 1956, p. 255; 田辺・木下前掲論文, p. 91.
- 5) 注1前掲書, Vol. 1, p. 229.
- 6) ピーター・スキリング (畝部俊也訳)「東南アジアにおけるジャータカとパンニャーサ・ジャータカ」(『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第22号, 2004), P. (28).
- 7) 注1前掲書, Vol. 1, p. 230.
- 8) 拙稿「大谷大学図書館所蔵貝葉写本 *Pannāsa-jātaka* 中の *Dulakapaṇḍita-jātaka* について」(『印度学仏教学研究』第51巻第1号, 2002), p. 366.

(本稿は、平成17年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「タイ所伝 *Paṇ-nāsa-jātaka* の校訂、翻訳と思想研究」の研究成果の一部である)

〈キーワード〉 パンニャーサジャータカ, *Pannāsa-jātaka*, *Sutadhanu-jātaka*, *Sudhanu-jātaka*, 貝葉写本

(東方研究会研究員)

a number of people see the same thing at a given place and time? This is one of the serious objections raised by realists against the Yogācāra idealistic doctrine, mentioned by Vasubandhu in his *Vimśatikā*. According to Prajñākaragupta, however, irrespective of whether external objects exist or not, one has to clear up the basic question whether we can say that others see the same thing as we see.

Sautrāntikas argue: When others have symptoms such as the bristling of the hair of the body, we, seeing them, infer that others experience emotions such as joy and hence that others also see the same thing as we see. In order to reject this view of the Sautrāntikas, Prajñākaragupta puts them into a dilemma. If they argue that others who are seen to have the bristling of the hair of the body are known to see the same thing as we see, then they have to accept the undesirable consequence that the joy experienced by others is not distinguished from that experienced by us. If, on the other hand, they want to avoid this consequence ensuing, then they have to accept that the thing others see and which gives them joy is different from the thing we see and brings us joy, that is, that others cannot see the same thing as we see.

According to Prajñākaragupta, in addition, any verbal act of others also cannot serve as evidence to show that others see the same thing as we see. For, we cannot perceive other minds. We cannot be perceptually aware that others see the same thing as we see, which is illustrated by the fact that two persons, who are afflicted by eye-disease (*taimirika*), cannot help each other. For Prajñākaragupta, even if two persons can speak of the existence of the external object, it is as if the two persons who are afflicted by eye-disease speak of the double moon.

Thus Prajñākaragupta's answer to the basic question mentioned above is: We cannot establish that others see the same thing as we see.

169. On the *Sutadhanu-jātaka* of the *Paññāsa-jātaka* Handed Down in Thailand

Michitoshi MANDA

Non-canonical Jātaka-stories, called the *Paññāsa-jātaka* (fifty-jātaka), spread throughout various regions of Southeast Asia. We have made a working edition of the *Paññāsa-jātaka* handed down in Thailand and have made a translation of it into Japanese by examining some palm leaf manuscripts. At the same time, we have made a comparative study with the Burmese edition presented by P. S. Jaini (*Zimme Paññāsa*).

The *Sutadhanu-jātaka* of the *Paññāsa-jātaka* recounts the adventures of Prince Sudhanu, who is a Bodhisatta, and his wife Cirappabhā. The first chapter of the past story in the *Sutadhanu-jātaka* is the topic of this article. We can find the influence of various cultures there. Moreover, there are many parallel passages between the Thai and the Burmese versions, and both have a gāthā in common. This seems to show that there was some interchange between two versions, though we can not determine the original of this story.

170. The Criticism of Heretical Views from the Viewpoint of the Doctrine of *Paṭicca-samuppāda* in Early Buddhist Literature

Mitsunobu NAKASONE

Free and lively discussions took place among philosophers and controversialists in central India at the time of the Buddha.

The Eternalist view (*sassata-ditṭhi*), the Annihilationist view (*uccheda-ditṭhi*) and the Fatalist view of the uncaused condition of existence (*ahetuka-ditṭhi*) are most famous of the various heretical views mentioned in early Buddhist literature.

How did the Buddhists criticize these heretical views, especially from the viewpoint of the doctrine of *paṭicca-samuppāda*? They advocated the doctrine of *paṭicca-samuppāda* which teaches the origin and cessation of *dhammas* based on causes and conditions.

The Buddhists emphasized the correctness of the theory, placing themselves in a logical position. On the other hand, they criticized heretical views, presenting them as sensational by asserting the doctrine of *paṭicca-*